

〔古今和歌集五〕うりんるんの木のかげにたゝすみてよみける

僧正遍昭

おび人の分て立よるこのもとはたのむかげなく紅葉散けり

〔竹取物語〕かのかくや姫をみまほしくて物もくはず思ひつゝ、かの家に行てたゝすみありきけれどもかひあるべくもあらず

〔倭訓栞中編十三〕たちもとほる。盤桓、躊躇徘徊などをよめり、立旋ほるの義也、靈異記に躊躇を

たちいざよふとよめり、

〔日本靈異記下〕用寺物復將寫大般若建願以現得善惡報緣第廿三

大伴連忍勝者略。中。歷五日乃甦語親屬言召使五人共副疾往、往道頭有甚峻坂、登於坂止而躊躇見

略○中

躊躇多○千○意○左○
與比天○

〔新撰字鏡足〕跨苦化反、去、踞也、股也、躡也、渡、〔同〕連字、踏跨上市柯反、下共依反、齊足而踊之、

〔類聚名義抄五〕跨昔恐行也、越也、方、太、乃、佐、々、比、

〔和字正濫抄四〕跨。あつとこえ。此字常にはまたがるとよむを、書にかく點せるは、あつといひ

て溝などをまたがりこゆる意歟、句絶の所にては、あつとこゆといふべし、あつとこふとはよむべからず、

〔南留別志四〕一跨をあそこゆるといふ、足迹のまたがりこゆるといふ意なるべし、

〔倭訓栞中編一〕あそこえ。跨をよめり、日本紀にあそこひと見え、あふとこひと見えたり、新撰

字鏡に踏跨をあふとこむとよみ、齊足而踊之貌と注せり、常にはまたがるとよめり、又あつとこ

ひともいふ、

〔倭訓栞前編二十九〕またがる。跨をよめり、股上るの義也、またぐともいふ、かる反ぐ也、新撰字鏡